論　文

独学者たちの啓蒙主義

Aufklärung von Autodidakten

藤　井　良　彦

FUJII, Yoshihiko

1．はじめに

30年戦争という災禍に見舞われたドイツであったが、「プロイセン民衆学校の父」ヴィルヘルム一世によって、急速に教育政策を推し進めることになる。「軍人王」でもあったヴィルヘルム一世の治下、教育政策が推し進められたことは矛盾にも思えるが、この傾向はその息子フリードリッヒ大王に引き継がれ、数々の政令の下、プロイセンは世界に先駆けて近代的な教育システムを導入するに至った。

その中でも、1754年の「ミンデン村落学校令」や、1763年の「プロイセン農村学校通則」などは有名である。後者では、教科書の国定制が導入され、「読み・書き・算術」が必修課程とされた。

しかし、この時期はまた、ラトケやコメニウスの教育学を皮切りとして、フランケの敬虔主義教育学であるとか、バゼドーの汎愛主義、そしてその後継者たちによる民衆教育思想などが盛んに打ち出された時代でもあった。ここに、「国民教育」としての民衆教育は着実にその基盤を固めつつあったのである。

2．新制大学設立の動き

さて、こうした傾向において、大学制度の改革も推し進められた。

ドイツにおける近代的な大学と言えば、フンボルトによる人文主義を称揚したベルリン大学が有名であろう。しかし、見方によれば、ハレ大学、それもそれを差し置いてゲッチンゲン大学こそドイツにおける最初の近代的な大学であったと言えるのである[1]。

ゲッチンゲン大学は、1737年に開校したハノーファーの大学である。

これは、1694年に設立されたプロイセンのハレ大学に対抗して設立された大学であったが、大局的には、ブレスラウ(1702年)、エアランゲン(1743年)、ミュンスター（1773年)、ボン(1786年)と続いた一連の大学設立の波に乗ったものの一つであった。

もっとも、ドイツの大学と言えば、中世以来のハイデルブルク大学などが有名であろう。

ドイツにおける大学設立は、14世紀半ば頃より始まった。それは、領主大学であったプラハ大学(1347年)やハイデルブルク大学(1385年)に始まり、都市大学であるエルフルト大学(1392年)やリューネベルク大学(1471年)などが後を追った。領主大学とは、領邦君主により設立された大学

であるが、その原型は1224年に教書が出されたナポリ大学であったのかもしれない[2]。その一方で、都市大学とは都市の参事会によって設立された大学で、当時の経済繁栄を背景として急速な発展を遂げたものである。これらに対して、一足遅れて設立されたマールブルク大学(1527年)やケーニヒスベルク大学(1544年)、イエナ大学(1558年)、ヘルボルン大学(1584年) などは「新制大学」とでも言えるだろう。

ともあれ、30年戦争を経て、ドイツにはライプニッツに学位を与えたアルトドルフ大学(1621年) など、17世紀にはまた多くの大学が設立されている。1655年には、ヴィルヘルム一世の父であるヴィルヘルム大選帝侯がドゥイスブルクに大学を設立した。それに続いて設立されたのがハレ大学であったが、ゲッチンゲン大学はさらにその理念を引き継いで設立された近代的な大学であった。

ゲッチンゲン大学(正式名称、Georgia Augusta) はドイツ語で書かれた「学則」を持っていたことで注目される。それは、当時の言葉で言えば、libertas philosophandiを公言した大学であった。それは、当時のヨーロッパ諸大学を席巻したヴォルフ哲学の標語でもあったが[3]、ゲッチンゲン大学としては、それを設立許可の勅許状において公式に認めたのであった。

そんなゲッチンゲン大学は、ハノーファー選帝侯ゲオルグ二世によって設立されたものであった。その勅許状には次のような二つの自由が認められている。まずは、その前文に銘記された「教育の自由(Lehrfreiheit)」である。そして、その第21節に銘記された私講師による講義の自由である。

このうち、「教育の自由」とはハレ大学設立に当たってのトマジウスによる理念でもあった。トマジウスは隣国のザクセンにあるライプチヒ大学から逃げてきたのである。それは、ハレ大学の目と鼻の先、20kmを隔ててある保守的なルター派の大学であった。

それに対抗して設立されたプロイセンのハレ大学は、神学ではなく法学を中心とした官制大学であった。それは、官僚を育てるために国家により設立された大学であった。従って、ハレ大学において神学部は中世以来の大学における地位を失ったことになる。しかし、それ以上にゲッチンゲン大学においては、哲学部が中心となって大学機構の組織化が進められたのであった。

これは、同大学がハノーファー選帝侯によって設立されたものでありながらも、実質的にその陣頭指揮を執ったのがミュンヒハウゼン男爵であったことによる。

言うならば、ハレ大学での理念が完全に実現化されたのがゲッチンゲン大学であったのである。

また、ゲッチンゲン大学には図書目録を備えた立派な図書館があった。しかも、学生たちはその膨大な書籍を自由に借り出して読むことができたのである。

そんなゲッチンゲン大学で学んだのがレッシングやシュレーゲル兄弟、フンボルト兄弟であった。疾風怒濤の時代を予想したレッシングのみならず、ロマン主義の時代を生きた彼らをも排出したこの大学が、優れた意味において近代的な大学であったことは間違いないだろう。

ところで、こうして大学の近代化が推し進められていた状況下、やはり事情により大学には通うことのできなかった者たちもいた。当時の言葉で言えば、彼らは「独学者(Autodidactos)[4]」ということになろう。しかし、そんな彼らこそが、ベルリン啓蒙と言われたドイツ啓蒙主義の核と

なる運動を率いた立役者となったのである。それは、「真理の判断において他者にではなく自らに従う[5]」という「哲学する自由」を掲げたヴォルフが、また「ドイツにおいて学派を形成した最初の哲学者[6]」でもあったことからする必然であった。

3．ニコライの生い立ち

フリードリッヒ・ニコライは書籍商の息子であった。祖父も出版業者であったようだが、父の書店はハレ大学を出た兄が継いだようである。生まれはベルリン、1731年のことであった。

ニコライは13歳の時にベルリンのヨアヒムスタール・ギムナジウムに入学したが、一年ほど在籍した後、ハレにあったフランケの学校に移っている。転校の理由としては、一つにはギムナジウムでの校内暴力にあったようである。この頃のハレでは、「フランケ学院(Franckeschen Stiftungen)」という事業が進められていた。これは、フランケが「貧民学校」を皮切りとして、「市民学校」や「高等女学校(Gynäceum)」を設立したことによる一大教育事業であった。このうち、ニコライが通った学校は当時の流行でもあったリッター・アカデミーの一種で、ペダゴーギウムと言われたものであった。

この学校において、ニコライはギリシャ語をシュタインという教授から教わったようである。ラテン語とギリシャ語という古典語教育は彼をして辟易とさせるものであったようであるが、『イリアス』を講読したニコライは、すっかりホメロスのファンになってしまった。

しかし、またすぐにニコライはベルリンにできたヘッカーの実科学校に移っている。これは1748年のことである。同学校の設立が1747年であることを考えれば、ニコライはできたばかりの実科学校に身を寄せたことになる。ニコライは、この学校においてミルトンの『失楽園』をドイツ語訳で講読したようである。後に、これを原書で読むために彼は英語の勉強をすることになる。1753年、彼が20才の時に発表された同書の評論はこの時の勉強をもとにしたものである。

ヘッカーはフランケの弟子であった。実科学校はライプニッツとも関係のあったゼムラーによって構想されたものであったが、思うように実現せず、フランケの弟子であったグロースやヘッカーによって現実化されたものである。フリードリヒ大王の期待も大きく[7]、同校は「王立実科学校」として認可されることになる。教育内容としては、主として職業教育と言えるようなものであったようである。

そこで、この学校はニコライ自身が「新しい学校[8]」と形容しているように、当時においては最先端の教育思想に基づいて創設されたものであった。同校で講じられた植物学、解剖学、経営学(農場運営)、自然学、測量法、機械学、天文学、数学といった実学は、ニコライにとってこれまでの学校では旧態依然の語学教育しか受けられなかったことからしても大変に新しいものであったようである。1748年、天文学の授業において、ニコライは日食と月食を観測している。また、週に二度の手工業の授業も、文字通りの職業教育ではあったがニコライを大いに楽しませたようである。

ともあれ、また一年ほどして、今度は書籍商としての腕磨きとして、ニコライはフランクフルト(アン・デア・オーダー)の書店で徒弟奉公をすることになる。これにより、ニコライは「学校」

を離れるのである。

しかし、ニコライは学業を放棄したわけではなかった。

その著作『私の学識ある教養について』(1799年)には、いかにして彼が独学をしたかが述べられている。同書の冒頭において、ニコライは次のように言っている。

「私は大学教育を受けることはなかったけれども、少年期より内なる衝動からして真剣に学問と、それも思弁的な哲学と取り組んできた[9]」。

ニコライは大学へ行くことはできなかった。

しかし、フランクフルトにはフランクフルト大学があった。彼はそこを訪れるだろう。書店の見習いとしてフランクフルトに来たニコライであったが、書店の店主は仕事の合間を勉学に充てることを許してくれた。そこで、ニコライはこつこつと勉強することができたのである。

とはいえ、この頃のニコライが置かれた状況は厳しいものであった。

当時の様子は、次のようにして振り返られている。「親方の小さな家では、冬の間、子ども部屋以外に暖かい部屋はなかった。その部屋には、小さな子どもたちと子守りがいたものだが、夕方にもなれば他に灯りはなかった。本屋には暖炉もなかったし灯りもなかったから、冬の間は日が暮れるや家へと向かったものである。私には、毎日の朝食の代わりに三つのものが与えられた。私は朝食を我慢することで、ランプと油、紙、そして何冊かの本も手に入れることができたのだから。そこで、冬の間は朝早く起きて、それも夜は遅くまで、私は寒い寝室でまるで王様のようにして本と共に暮らしたものである。あの頃は、寒さのためにベッドの中で勉強をしていた。それが、或る晩、ベッドの中で勉強しながら眠ってしまって、家に火をつけてしまったことがある。あれ以来、私はどんなに寒い日でもベッドには戻らないことにしている[10]」。

そんなニコライがフランクフルト大学を訪れた時の模様は、彼自身によって次のように述べられている。「当時のフランクフルトでは、アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンが哲学を教えており、世上に名声を博していた。私は幸運にも彼の授業を聴講することのできた学生たちをうらやましく思い、可能な時には、閉じられた扉に忍び寄っては、その一言二言を聞き取ろうとした。というのも、私はゴットシェードの『哲学原理』を既にベルリンで読んでいたのであり、それによって思弁哲学に関心を抱いていたからである。当時は、あらゆる哲学が数学的な方法で探求されていたものである。バウムガルテンは判明で愉快な講義をしていた。私はこれまでに多くの教授たちの講義を大学で聴講してきたが、バウムガルテンに並ぶ者はプラトナーの他には知らない[11]」。

しかし、ニコライはまたフランクフルト大学の学生たちと親しくすることで、同大学の教壇に立っていたバウムガルテンのノートを写させてもらっているのである。

その頃の模様は、またニコライ自身によって次のように語られている。「私はこの有名な哲学の講義の熱心な聴講者たちの何人かと知り合うことができた。その中には、パッケという後にマグデブルクで説教師として骨を埋めることになった者もいた。彼は、バウムガルテンの論理学や形而上学、それからまた美学についての講義を筆記したノートを貸してくれた。私は、このノートを、それと関係のあるヴォルフの『論理学』とバウムガルテンの『形而上学』、『美学』を手にしな

がら注意深く研究し、その多くを書き写したし、口頭ではパッケやその友人たちの助言に耳を傾けたものである[12]」。

この頃、ニコライはベールの『辞典』を手にしたようである。この浩瀚な著作に対するニコライの評価は高い。同書によって、ニコライは哲学史に関心を寄せるようになった。そこで、ニコライはスタンレーの『哲学史』(1711年) なども読んだようである[13]。こうして、ニコライの関心はヴォルフ、バウムガルテンからさらに遠くへと広がっていった。デカルトの『書簡集』や『情念論』、ロックの『人間知性論』(ラテン語訳[14])などはニコライをして大いに楽しませたようである。また、その他にルルスの『大いなる術』やアグリッパの『学術の不確実さと空しさについて』といった中世後期の著作にも彼の関心は向いた。

そこで、ニコライの考えは次のように変わったのである。「これほどまでに様々な哲学思想があることに驚いたものである。それまでは、哲学においては数学におけるのと同じように何もかもが確かなことであると、それも、バウムガルテンとヴォルフがあらゆることを論証した以上、そうなのだと思っていたのだから[15]」。

さて、そんなニコライがベルリンへと戻ったのは1752年、彼が19才の時であった。ニコライはフランクフルトでの三年間を振り返って次のように述べている。「克己勉励して辛抱し、厄介ごとに屈することのない明るい気持ちでいれば、三年の間にも多くのことを学べるのである。また、つつましくして、機械的な業務にも精を出したならば、肉体的にも健康でいられる。これは、老若を問わずに言えることである。抽象的な思考をするにしても、ただ思考と構想のうちに生きるよりは、日常的な生活にもいそしんだ方が、精神の健康のためには良いことだろう[16]」。

ともあれ、ベルリンではレッシングの紹介によって一人のユダヤ人を紹介されることになる。

4．メンデルスゾーンの生い立ち

メンデルスゾーンの略歴については、彼自身によって次のように語られている。

「私は、1729年にデッサウで生まれました。私の父は、教師で、十戒の筆写者(Sopher) でした。当時はデッサウの上級ラビであったフレンケルのもとで、私はタルムードを学びました。その後、この学識あるラビは、そのイェルサレム・タルムードの注解により、ユダヤ人の間で大きな名声を獲ました。1743年頃、彼がベルリンから招聘されたので、私も同じ年に彼について行きました。ベルリンでは、後に医学博士となったアーロン・グンペルツ氏と知り合いになり、学問に興味を持ちました。この方からは、いくらか学問の指導も受けました。当地では、裕福なユダヤ人の家の家庭教師となり、その後、その家の方の工場の帳簿係となり、最終的には工場長となりました。今も私はこの地位に就いています。33年間の結婚生活において、７人の子供が生まれましたが、無事に育ったのはそのうちの５人です。それはそうと、私は一度も大学に行ったことがないので、講義を聴講したことがないのです。これは、私にとっての大きな障害のうちの一つでした。私は何もかも努めて独学で獲得しなくてはなりませんでした。実際、私は頑張り過ぎたようで、過度の勉学によって、ここ３年来は神経衰弱を患っています。これにより、私はどんな学問的な営みも全くできずにいるのです[17]」。

モーゼス・メンデルスゾーンは、ユダヤ啓蒙(ハスカラー運動)の旗手として名高い。その仕事は、美学から形而上学、旧約聖書の翻訳にまで及ぶ。しかし、言われているように、彼は大学教育を受けたことがなかった。

彼の名前、モーゼスは、母親のいとこの父であった故モーゼス・ベンジャミン・ヴルフからとられたようである。ヴルフは、デッサウにベス・ミドラシュ（学問所）と印刷所を建設したことで有名である。この印刷所では、中世スペイン以来の書物が多く印刷されたのであった。

そのうちで有名なものは、メンデルスゾーンも愛読したマイモニデスの『迷える者達の導き』である。再版されたのは、その訳者であるシュムエル・イブン・ティボンによる用語集などが付されていた、1553年にサビオネで出されたヘブライ語訳である[18]。これが印刷されたのは1742年のことであるから、翌年にはベルリンを発つことになるメンデルスゾーンは出たばかりの同書を手にしたことになる。また、ルリアの書物など、カバラに関する書物が多く印刷されていたこともこの印刷所の特徴であろう。

さて、幼少期よりの脊椎後湾症に悩まされながらも、メンデルスゾーンは師事していたラビのもとを追って徒歩でベルリンへと向かった。それは、1743年、彼が14才の時であった。当時のベルリンでは、ユダヤ人が街に入るためには牛一頭分の人頭税が必要であった。

その時の様子は、次のようにして語られたことがある。それは、ドイツのユダヤ人にとっての「原型(Archetype)[19]」とされるメンデルスゾーンの有名な物語である。

「フリードリヒ二世による治世三年目に当たるこの年、ローゼンタール門をくぐることが、一人のこの時はまだ無名のユダヤ人に許された。小さな、それも少し背中の曲がった色白で虚弱に見えるユダヤ人の少年は、13才か14才の頃にプロイセンの首都に入ることを求めたのであった。ゲマインデの役人として移住者を取り締まっていたユダヤ人の門番は、彼に名前と出自を聞いた。彼は答えて、モーゼスです、デッサウの十戒の筆写者であるメンデルの子ども(ゾーン)です、と言った。ベルリンに滞在する目的は何かとの問いに、彼は「勉強すること」と答えた[20]」。

この若者、モーシェ・ミ・デッサウはモーゼス・メンデルスゾーンというドイツ語名を名乗りゲットーの外へと出て行ったのである。その名が有名になったのは、まずは1763年におけるベルリン・アカデミーでの懸賞論文の表彰式でのことであろう。彼は、当時はまだ無名であったカントとの接戦を制して大勢の中から懸賞を勝ち取ったのである。そして、それに続いて1767年に出された『フェードン』は、彼の名をヨーロッパ中に轟かせることになる。メンデルスゾーンがケーニヒスベルク大学を訪れた時、カントの講義を聴きに集まっていた学生たちは「モーゼス・メンデルスゾーンだ！　ベルリンのユダヤ人哲学者だ！[21]」と騒いだものである。

ニコライは、知り合った当初のメンデルスゾーンを評して次のように述べている。「彼は今のドイツが擁している偉大な才能の一人です。学問における彼の進歩の歴史は、我々の大学での勉強がいかに無益なものであるかをよく示してくれています[22]」。

とはいえ、ベルリンに着いた頃のメンデルスゾーンは、ユダヤ教に関する勉強しかしていなかった。その頃のベルリンには、豪華なシナゴーグに続いてベス・ハミドラシュが建設された頃であり、メンデルスゾーンもまたそこで学んだのであった。最初の頃は、フレンケルが執筆していたパレスチナ・タルムードの筆写などをしていたようである。

ベルリンには、またザモスという名のユダヤ人がいた。この「ガリティアからやって来た独学者[23]」は、イェーフダ・ハレビの『クザーリ』の注解や、イェーフダ・イブン・チボンによるものとされていた著作の注解などを著わしており、その中世ユダヤ哲学に関する豊富な知識はメンデルスゾーンにも影響を与えたようである。『クザーリ』の注解に関しては、メンデルスゾーンがそれを筆写していたという話も伝えられるところではある[24]。

ともあれ、そんなメンデルスゾーンにも転機が訪れた。

その事情は次のようである。「メンデルスゾーンは、タルムードや中世思想の世界に没頭したところで、自分の知的好奇心が十分に満たされるものではないことに思い至った。そのために必要な知的手段を獲得したところで、ベルリンという街はさらに多くのことを求めているように感じられたのである。1745年、王立学術アカデミーは『紀要(*mémoires*)』を王がひいきにしていたフランス語で出版することにした。つまり、フランス語の読み方や話し方を知らずにベルリンに住むことは、高等な文化への参加を諦めることに等しかったのである。それに、古典文学や学術論文にアクセスしようと思えば、ギリシャ語やラテン語を修得している必要があった。また何よりも、間違いのないドイツ語の読み書きを学ぶ必要があったのである[25]」。

イデッシュ語を母語としたメンデルスゾーンであったが、ドイツ語の壁は必ずしも低くはなかった。これについてはニコライが次のように証言している。「優秀なモーゼスにとっても、最初の頃はドイツ語で支障なく表現することはとても難しいことであった。決して彼にとっての母語ではないこの言語の性格を少しずつ正しく把握するために、信じられないほどの努力がなされたのである[26]」。

当時のベルリンにおけるユダヤ人の生活はかなり自由なものであった。彼らはゲットーに押し込まれていたわけではないし、狭いユダヤ人街に暮らしていたわけでもない。立派なシナゴーグやベス・ハミドラシュは多くの人を惹き付けるものであったろう。そこで、当時のベルリンには多くの知識人たちが集まった。

そのうちの一人が、先に述べたザモスであるが、その他にもアブラハム・キッシュという若者がいた。この者は、ハレ大学で医学を修めたようであるが、その学力からしてメンデルスゾーンにラテン語の手ほどきをしたようである。そこで、メンデルスゾーンはヨアヒムスタール・ギムナジウムにおいてラテン語による哲学の授業を受けることができるようになった。

その直接のきっかけは、グンペルツという若者によるものであった。それは、おそらく1746年頃のことである[27]。メンデルスゾーンは、このグンペルツからフランス語と英語を教わったとも伝えられているが、はっきりとはしない。しかし、彼がこの若者から大きな影響を受けたことは確かである。メンデルスゾーンは言っている。「私が学問において得たものは、何もかもただ彼に負っているのです[28]」。

グンペルツもまた中世ユダヤ哲学への造詣が深く、アブラハム・イブン・エズラの書物に注解を著してもいる。彼はまた自伝を書いたことでも知られる。ゴットシェートのもとで教わる予定もあったが、第二次シレジアン戦争の災禍は彼がライプチヒ大学を訪れることを妨げた。1750年、グンペルツは仕方なく医学を修めにフランクフルト大学へと旅立つことだろう。

ところで、既に述べたように、ヨアヒムスタール・ギムナジウムはニコライも通っていたこと

のある学校である。そこでメンデルスゾーンが受けた哲学の授業は、ハイニウスによるものであったらしい。また、メンデルスゾーンが親しくしていたズルツァーという美学者もこの学校の教壇に立っていた。

ベルリンに大学が設立されるのはずっと後のことである。

5．ベルリンにて

さて、ベルリンへと戻ってきたニコライであった。

書店の仕事は忙しく、この頃のニコライは朝早くから、それも仕事が終わった夕方から夜遅くにかけて勉強していたようである。しかし、父が死んでからは、書店は兄が継ぐことになった。そこで、ニコライはまたいくらか自由な時間を手にしたようで、ヴィンケルマンの著作などを読み美学の勉強を始めたようである。この頃の勉強は、彼の処女作である『ドイツにおける美学の現状についての書簡』(1754年）に結実している。この著作は、当時の美学界における論争を調停したものとして高く評価される。

さて、そんな1754年の暮れ、ニコライはレッシングと出会う。レッシングは『ドイツにおける美学の現状についての書簡』を読んで、その著者を探していたのであった。そして、すぐにまたそのレッシングの紹介によって、ニコライはメンデルスゾーンと出会うことになった。

すぐさま、三人は親しげに議論を交わす間柄となった。レッシングがベルリンを離れてからは、メンデルスゾーンがニコライの家の庭を毎日のように訪れては二人で議論を交わした。その時の模様は、メンデルスゾーンがレッシングに宛てた書簡から窺える。

ところで、この頃のメンデルスゾーンは歴史的なことに関しては何も関心がなかったようである。なぜなら、ニコライが次のように証言しているからである。「モーゼス・メンデルスゾーンは、その頃は主として思弁的な観念のうちに生きていた。歴史的とされること一切に関して、彼はほとんど何も知らなかったし、それどころか当初は強い反感さえ抱いていた[29]」。

メンデルスゾーンの『哲学対話』(1755年）における「哲学史的なパースペクティヴ[30]」は、ニコライの影響を俟って開かれたのであった。「歴史は松明を掲げて啓蒙の先頭を進む[31]」とは、ニコライの言である。

しかし、そのニコライもまたメンデルスゾーンから影響を受けた。ニコライはカバラに関する知識を彼から得たのである。彼自身が述べているところでは、その著作『テンプル騎士団、薔薇十字団及びフリーメーソン研究[32]』(1782年)にはこの時の影響が反映されている。また、この点に関して言えば、レッシングが去ってからの二人の間には、ハレ大学の教授であったエーベルトハルトがいたようであるが、彼もまたメンデルスゾーンからカバラに関する知識を得たようである[33]。彼の著作『哲学史』(1788年)には、その影響が見られることだろう。

ともあれ、ニコライによれば、彼の勉強は本格的には1756年より始まった。

彼自身の証言によれば、1757年、彼はメンデルスゾーンと共にホメロスを原書で講読している。ギリシャ語の勉強をメンデルスゾーンに勧めたのはニコライであった。

そうした頃、兄の死によってニコライは書店を引き継ぐことになる。これは1758年、彼が25才

の時である。ニコライはさっそくホメロスの胸像を店先に飾るであろう。

ここにベルリン啓蒙主義の旗手、ニコライが誕生したのである。

さて、その後の動向としては、ミュヒラーによって設立された集まり、「学識者のカフェ」が注目されよう。これは、週に何度かベルリンのカフェに集まって、ビリヤードをしながら語り合い、時には論文発表会を行って議論を交わすというものであった。この集まりには、ニコライとメンデルスゾーンのみならず、先に述べたグンペルツやズルツァーなどが参加していたが、その他にも、オイラーの息子でやはり数学者であったオイラー、またレーゼヴィッツといった神父などが参加していた。ニコライたちは、ズルツァーやオイラーといったアカデミーの会員とこうした場で交流することができたのである。

また、「月曜クラブ」という集まりや、後には「秘密結社」として「ヴェルナー反動の時代」を生き延びた「ベルリン水曜会」という集まりにもニコライの姿はあった[34]。同会の機関誌とも言える『ベルリン月報』に掲載されたメンデルスゾーンの論文「啓蒙するとはどういう意味か？という問いについて」(1784年)は有名である。しかし、ニコライはレッシングとメンデルスゾーンと共に、『最新文芸書簡』(1759-65年) を発刊したのだし、これにはロングセラーとなったニコライ一人による編集となる『ドイツ百科文庫』(1765-84年) が続いた。彼らはその活躍の場をこのような書評雑誌に求めたのであるが、そこで活かされていたのが出版業者としてのニコライの手腕であった。

ここに、また実業家としてのニコライの姿が認められるのである。メンデルスゾーンにしても、その生涯の大半を工場の帳簿係として暮らしたのである。独学者としての彼らは、必ずしも知識人というような階級にあったわけではない。しかし、そんな彼らの学問こそが啓蒙の灯火となってベルリンの街を照らしていたのである。

6．結び

汎愛派の一人であったロッホウの『民衆学校による国民的性格について』(1779年)においては、村落学校の「国民学校(Nationalschule)」化が提言されるに至る。ロッホウ自身の意図はともかくとして、ここに「国民教育」を事とした「民衆学校」という近代的な学校概念が登場したわけである。

1787年には国務大臣ツェドリッツ男爵によって有名な「高等学務委員会」が設置された。そして、1788年には「ギムナジウムへの進学試験規則」と「大学への進学試験規則」が制定され、1794年には「一般ラント法」により学校施設の公共化が図られた。

こうした傾向は、「ヒューマニズムの教育から、ナショナリズムの教育への転換[35]」と指摘されるように、教育の公共政策化であったと言える。ハレ大学に始まった官制大学設立の動きも、ベルリン大学設立(1810年)によって極まることだろう。

しかし、そうした時代を彩るベルリン啓蒙という運動は、こうした教育政策の外で起こっていたことなのである。それは、独学者たちによる啓蒙であった。それが「通俗的」であったとすれば、それは大学における学問のあり方を批判するものであったからである。ニコライの出版業は学識の「通俗化」という観点を抜きにしては正当に評価し得ないものであるし[36]、第二言語としてのドイツ語で書かれたメンデルスゾーンの著作にラテン語が出てこないことの理由もまた学問の「通

俗性」という原則を離れては理解され得ないものである。こうした、いわば「在野」である彼ら啓蒙主義者たちによって、近代の学問は「教養(Bildung)」として世に出たのであった。

註

1　ゲッチンゲン大学については以下に詳しい。別府昭郎「近代大学としてのゲッティンゲン」(『広島大学論集』第35集、2004年、387-401頁)。

2　以下を参考。梅根悟監修、世界教育史研究会編『世界教育史体系11 ドイツ教育史I』講談社、34-35頁。なお、ドイツにおける大学設立の経緯については、同書の序章と第三章の他にも以下を参考にした。梅根悟『近代国家と民衆教育―プロイセン民衆教育政策史―』誠文堂新光社、1967年。

3　ヴォルフは、『哲学一般についての予備的叙説』(1728年)の169節において、libertas philosophandiについて次のように述べている。「もしアリストテレス・スコラの哲学から一歩たりとも離れることができなかったとしたら、哲学の収穫がいかに貧弱であったか、理解しない人がいるであろうか。哲学的諸学が手にした繁栄は、軛を投げ捨て、哲学する自由を要求し、哲学的隷属に甘んじているものたちを糾弾した人々に負っているのである」。引用は山本道雄氏と松家次朗氏によって訳された同書の第三版(1740年)から。神戸大学大学院文化学研究科『文化学年報』15号、1996年、159頁。

4　これは、C. H. ミュラーがランベルトを評して用いた言葉である。*Joh. Heinrich Lamberts logische und philosophische Abhandlungen. Zum Druck befördert von J. Bernoulli*, Bd. 1, 1782, p. xiv.

5　C. Wolff, *Ausführliche Nachricht von seine eigenen Schrifften, die er in deutscher Sprache von den verschiedenen Theilen der Welt=Weißheit heraus gegeben*, Franckfurt am Mayn, vermehrte Auf, 1733, Cap 4, § 41.

6　K. Rosenkranz, *Geschichte der Kant'schen Philosophie*, Leipzig, 1840, p. 50.

7　これは、例えば同校で教えられていた養蚕が国家産業となったからである。「この形の実科学校は、まったく実際的な目標を設定していたことによってフリードリヒの重商主義的見解に完全に合致したものであった」。H. ワイマー、W. ツェラー『ドイツ教育史』平野一郎監訳、黎明書房、131頁。なお、教員養成所の設立を大王に進言したのも彼だが、これには教員に教職という身分を与える者として歴史的な重要性が認められる。ヘッカーはまた「農村学校通則」の起草にも関わっている。

8　F. Nicolai, *Über meine gelehrte Bildung*, Berin, Stettin, 1799, p. 5.

9　ibid., p. 15.

10　ibid., p. 26.

11　ibid., pp. 26-27.

12　ibid., pp. 27-28.

13　このラテン語の本はメンデルスゾーンも所持していた。cf. *Verzeichniß der auserlesenen Büchersammlung des seeligen Herrn Moses Mendelssohn*, H. Meyer (hg.), Berlin, 1786, p. 12.

14　メンデルスゾーンもこの訳書(1741年)を手にしたのであった。なお、同書に関してはドイツ語訳(1755年)が後に出されているが、ニコライはこれをメンデルスゾーンと共に読んでいる。それも、ライプニッツの『人間知性論新説』(ラスペ版)と比較対照しながらのことである。

15　Nicolai, *Über meine gelehrte Bildung*, p. 34.

16　ibid., pp. 38-39.

17　Von M. Mendelssohn an J. J. Spiess, März 1, 1774.

18　cf. M. Albrecht, *Moses Mendelssohn, 1729-1786: Das Lebenswerk eines jüdischen Denkers der*

deutschen Aufklärung, Hannover, 1986, pp. 29-30.

19 cf. A. Mendelssohn, *Moses Mendelssohn as the Archetypal German Jew*. in; *The Jewish Response to German Culture*, J. Reinharz, W. schatzberg (eds.), Hanover, London, 1985.

20 S. Stern, *Geschichte des Judentums von Mendelssohn bis auf die neuere Zeit*, Breslau, 1857, pp. 57-58.

21 A. Lewald, *Ein Menschenleben*, 1ter Theil, Leipzig, 1844, p. 99.

22 Von Nicolai an J. P. Uz, März 26, 1759.

23 D. Sorkin, *The Eearly Haskalah*, p. 17. in; *New Perspectives on the Haskalah*, S. Feiner, D. Sorkin (eds.), The Littman Library of Jewish Civilization, 2001, pp. 9-26.

24 cf. M. Kayserling, *Moses Mendelssohn, Sein Leben und seine Werke: Nebst einem Anhange ungedruckter Briefe von und an Moses Mendelssohn*, Leipzig, 1862, p. 275 (n. 2).

25 A. Altmann, *Moses Mendelssohn*, Alabama UP, 1973, p. 22.

26 *Moses Mendelssohn's Gesammelte Schriften*, G. B. Mendelssohn (hg.), Bd. 5, Leipzig, 1844, p. 205.

27 cf. ibid., p. 767 (n. 52).

28 Von Mendelssohn an F. Gugenheim, Juni 16, 1761.

29 Nicolai, *Über meine gelehrte Bildung*, p. 40.

30 平尾昌宏「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈」、95頁。(『スピノザーナ』11号、2010年、87-104頁。)

31 F. Nicolai, *Einige Bemerkungen über den Ursprung und die Geschichte der Rosenkreuzer und Freymaurer*, Berlin, Stettin, 1806, p. 27.

32 ニコライは、ベルリンにおいて「三つの地球儀」というフリーメイソンのロッジ(支部)に潜入していた。ニコライによれば、1773年に廃止されたイエズス会は密かにフリーメンソン協会へと活動の場を移していたのであった。この本の概要については以下に詳しい。戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人　フリードリヒ・ニコライ』朝文社、270頁以下。

33 cf. Von J. A. Eberhard an Mendelssohn, Aug. 15, 1785.

34 ニコライは、「三つの地球儀」やイルミナティの団体のような「秘密結社」を快く思ってはいなかった。しかし、そのニコライはまた「ベルリン水曜会」という「秘密結社」のメンバーでもあったのである。この点については以下を参照。R. Vierhaus, *Friedrich Nicolai und die Berliner Gesellschaft*. in; id, *Deutschland im 18. Jahrhundert*, Göttingen, 1987.

35 梅根悟『西洋教育思想史２』誠文堂新光社、1968年、5頁。

36 cf. H. Möller, *Aufklärung in Preussen: Der Verleger, Publizist und Geschichtsschreiber Friedrich Nicolai*, Berlin, 1974, Kap. 3.